

# 視点

西嶋豊彦  
(日本画家)

## アートと発達障害 — 読み書き障害 —

(一) にあうことばを□  
からえらんで書きましよう。

一 一の中の正しいことば  
を○で囲みましよう。

小学生のテストでは、この  
ような問題がよく出ます。

私は問題文を読んでいては  
到底時間が足りないことがわ  
かっているため、問題文はほ

は読まず、勘と推測だけで解  
答していたことを覚えていま  
す。

国語の時間。前の席の人か  
ら順に、音読をする……私は  
内心に湧き起こる激しい動揺  
と焦りを隠しつつ、自分の番  
がまわってくる段落の位置を  
予測し、何気なくわからない  
ふりをしながら後ろの席の友  
人に教科書の漢字の読みを訊  
ねる……

四十年近くも前の話ですが、  
今でも鮮明にあの時の緊張感  
がよみがえります。私は、文  
字を読むことに関して、人一  
倍、いや、それ以上、時間と  
エネルギーを要していました。

発達障害は、生まれつき脳  
機能の発達がアンバランスで、  
人とかかわる中で社会生活に  
困難が生じる障害をいいます。  
その症状は十人十色で、私の  
ような症状は読み書き障害と  
いわれ、他の発達障害も少し  
重なることも多いようです。  
同じ読み書き障害を持つ人で  
も文字の見え方はそれぞれ異  
なりですが、私の場合、文字  
が一つ一つの記号のように見  
えるといえますか、たとえば  
普通に読むことのできる人に

は「つくし」という三文字が  
同時にまとめて目に入り、「つ  
くし」を思い浮かべられるよ  
うですが、私には「つ」と「く  
し」と「し」とが粒状の文字とし  
て感じられ、瞬時に「つくし」  
のイメージが頭に浮かばない  
のです。この感覚は、読むこ  
とに困らない人が、句読点  
のないカタカナだけの文字を  
読むようなものだと思います。

ソノシヨウジヨ  
ウハジユウニ  
トイロデワタシ  
ノヨウナシヨウ  
ジヨウハ……

私は長年、読み書きが苦手  
なことにコンプレックスを感  
じ、家族にさえ隠して生きて  
きました。それが、昨年、私  
の息子が苦手なことに自分の  
苦手なことが似ていること  
に気づき、五十歳を過ぎて読  
み書き障害のを知ること  
となりました。

今思えば、息子は小学校二  
年生までは読み書き障害だと  
わからず、読み書きが苦手な  
ことで頭が悪いと思ひ込み、  
自分の頭をひどく叩いていた

こともあったのです。

発達障害の凸凹は、医学的  
にはマイナス面があるために  
障害だと診断されますが、経  
験を重ねたり、凸の特性を活  
かしたりして凹の部分のカバ  
ーすることもあります(ただ、  
一般的な病気とは違い、治る  
ことはありません)。世の中  
には、こうした凸の部分を持  
みに変換して活躍する人もい  
ますが、現実には、本人を取  
り巻く環境、メンタルの強さ  
などに左右され、社会的に認  
められるのはなかなか容易で  
はありません(私は、大学で  
教えるときに「書き物」には  
苦戦したので実感していま  
す)。

このたび、私はアート活動  
を通して、発達障害の認知を、  
理解を広められないかと考え  
ています。近年は発達障害を  
とりまく環境改善を図る社会  
活動が各地で行われています  
が、さらに広められないかと  
思うのです。凹凸のある障害  
を素敵な個性と捉え、一人一  
人にあった形で凸の部分を表  
現する、さらには、表現する  
ことが本人の自己肯定につな  
げられないかと考えています。

たとえば、私も息子も文字の  
読み書きは苦手ながら、私は  
模写の能力が強いようですし、  
息子は平面のものを立体化す  
る力が強いように見えます。  
当事者として、親として、表  
現者として、発達障害の凸の  
個性を引き伸ばすお手伝いが  
できないかと思うのです。

今回、ここに書かせていた  
だいたのは、アーティストの  
中には私と同じように悩みを  
抱えた方がいるかもしれない、  
また、読者の中にはこの活動  
に賛同者がいるかもしれない  
という思いがあったからです。  
人が集まることからのスター  
トとなりますが、力をお貸し  
いただけたらうれしく思いま  
す。(執筆協力・竹田陽平)

### ■インフォメーション

「解放—日本画への挑戦—西嶋豊彦展  
会 期：9月5日(水)～10日(月)  
※会期中は終日在廊  
会 場：日本橋三越本店 本館6階  
美術特選画廊  
住 所：中央区日本橋室町1-4-1  
※詳細は252頁参照

このエッセイに関する問い合わせ先  
office@nishiimayohiko.com